



「阪神淡路大震災の教訓は？」をテーマに調査・研究を続けて毎年災害メモリアル KOBE で発表しています。今年は、住民 9 人、研究者ら 12 人、消防経験者 4 人、マスコミ関係者 3 人の計 28 人にインタビューしました。昨年の 27 人と合わせて 55 人となり、新聞の枚数としては 19 枚となりました。会場の皆さんに一部ずつ、2 年生が「号外です」と言いながら、配りました。



当日の発表は、200 名ほど入るホールで、1 チーム持ち時間が 15 分と限られた時間の中で、発表を行いました。参加チームは、兵庫県立大学・兵庫県立舞子高校・滋賀県立彦根東高校・国立明石工専・神戸学院大学・関西大学の 6 チームでした。私たちの発表内容は、インタビューを行った人の中で、6 名の方のインタビュー内容について、発表しました。「人間は知っている人は助けようとするが、知らない人は助けない」という言葉に驚きました。



私たちがこの活動を通して、当時の話をただ聞くだけではなく、教訓を自分たちから次の世代に繋げていくことの大切さを学びました。私たちのような震災を経験していない若い世代が、教訓を伝えなければ、阪神淡路大震災はただの過去の事象になってしまう。災害が起こった後、何をしていくかが今後の災害大国日本に必要なことではないのかと思いました。

2010 年 3 月 12 日

神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ 2・3・4 年生一同

「震災 25 年若者キャンペーンプロジェクト活動発表会活動報告書」

災害メモリアルアクションKOBE 2020 「わせらん新聞」第2号 ～阪神淡路大震災の教訓～

神戸学院大学 / 現代社会学部 / 社会防災学科 / 安富ゼミ



インタビュー

昨年度の活動では、「行政」「マスコミ」「研究者」などといった専門的な知識をもった方々にインタビューをしましたが、今年度は昨年度分野に加え「住民」「消防官」の方々にインタビューをさせていただきました。阪神淡路大震災から得た教訓、災害に対する考えを家族や大切な人に伝えているかについて調べてきました。



インタビューにご協力いただいた方々、ありがとうございました！



インタビューは、学生が2～3人組となって対象者にアポイントを取り、実施しました。インタビュー対象者の中には、今なお防災の第一線で活躍されている方ももちろん、震災当時現場で活躍されていた方など、幅広い方々に協力いただきました。期間は7月下旬から12月上旬の約五か月の間で、合計27人の方々にインタビューをさせていただきました。

新聞作成

今年度も昨年度に続き、インタビューにとどまらず、「発信」にも力を入れ、正しい伝え方を模索する一つ的手段として新聞を選び、読売新聞大阪本社で35年間、記者として働きデスクも経験している安富先生の監修の下作成しました。神戸新聞社が提供するクラウド型アプリ「ことまど」を利用し、新聞を作成しました。

「ことまど」は、小学生が学校で新聞作成のために利用するアプリです。簡単に、本格的な新聞を作成することができます。

新聞名は、「わせらん新聞」としました。「わせらん」とは、淡路島の方言で、「忘れない」を意味します。

教訓と災害に対する考えを聞き、さらに家族や大切な人に話しているか、などのインタビューした内容をまとめました。阪神淡路大震災の当時の思いを風化させないという気持ちを含めて、全部で9枚の新聞にまとめました。



-----Member-----

教授 (デスク) 安富 誠
3年 (記者) 楠橋 力 林 優真
鈴木 大貴 武岡 洸樹 安藤 彪華
灘井 彩乃 榎本 侔生 山 楓生
佐々木 文都 田邊 銀平 大矢 哲也